

がん登録の現場から

診療情報管理士が担う未来を拓く情報のちから

がん登録は、医療の質向上や政策立案の根拠となる大切な情報基盤です。当院では、国立がん研究センター認定「院内がん登録実務中級者」（上位資格）を有する診療情報管理士が、電子カルテをもとに、正確で信頼性の高い情報提供に努めています。がん拠点病院の要件でもあるこの資格は、高度な知識と実務経験に加え、毎年の研修や4年ごとの更新受験により認定を維持。日々の積み重ねが、未来の医療に確かなかたちで貢献しています。

「一つひとつの情報を未来の医療につなぐ」それが、診療情報管理士の大切な役割です。



登録精度が支える
医療の信頼

言葉に学び

未来へつなぐ登録のちから



大阪府がん診療拠点病院の登録部会に所属し、研修会にも継続して参加しています。日々のデータ分析やQI（医療の質指標）研究を通じて活用されるがん登録情報は、罹患率や生存率といった統計に反映され、地域の医療政策にもつながっています。これらの情報は、国の「がん対策推進基本計画」や大阪府の施策とも連動し、現場の登録業務が政策の土台を支えていることを実感しています。

また、大阪国際がんセンターの総長、がん登録部会長が研修会で紹介された数々の印象的な言葉は、がん登録にかかわる意義を改めて認識させてくれるとともに、日々の業務に励ましと新たな視点を与えてくれます。

学びを深め

実務に活かすちから

大学院では、医療情報やマネジメント、EBM（根拠に基づく医療）に加え、ICD-11やICFを基盤とした医療情報の標準化と利活用を推進してきました。また、がん登録やDPCを含む医療データの精度管理・分析を通じて、正確な情報が地域医療や社会に果たす役割について、多角的に理解を深めました。

現場の経験に学びが重なったことで、医療情報をどう捉え、いかに社会に役立てていくかという視点が一層深まり、日々の業務にも新たな意味が加わっています。さらに、院内がん登録をテーマとした学会発表や診療録監査などの実践を通じて、学びが実務に定着していく実感も得られています。

こうした知見は、診療情報管理士などの医療人材の育成にも活かされ、教育の場における知識の共有へとつながっています。



がん登録を支える診療情報管理士

診療情報管理士は、患者さんの診療記録を適切に管理し、医療の安全と質の向上に貢献する専門職です。電子カルテを活用し、診療情報を整理・分析することで、精度の高い医療の提供を支えています。また、院内がん登録の情報管理を通じて、がん診療の質を高め、医療を支え、未来へつなぐ情報の架け橋となっています。「確かな情報が患者さんの未来をひらく」その想いを胸に、日々業務に取り組んでいます。

診療情報管理士/院内がん登録実務中級者認定 梅本 一美

がん登録

